

1977-9

No.108

表紙 炎舞図 速水御舟筆
解説は27ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

もくじ

歌舞伎——別の視角——	戸板康二	4
ヨーロッパとアメリカのオーケストラ	藤田由之	5
ことばのない世界	アキコ・カンダ	8
東南アジアとの文化交流をめぐって(一)	鈴木一郎	11
文化庁ニュース		
第1回全国高等学校総合文化祭開催される		15
昭和52年度(第32回)芸術祭の開催計画決まる		16
昭和52年度(第32回)芸術祭主催公演計画		17
第7回移動芸術祭秋季公演9月から全国各地で		18
文化庁派遣(第11回)芸術家在外研修員を決定		20
「新漢字表試案」説明協議会終わる		23
国語問題研究協議会を開催		23
日本語教育映画試写会の開催		24
日本語教育研修会の開催		24
第4期著作権審議会発足		24
文化財集中地区特別総合調査		25
重要文化財旧北村家住宅10分の1模型について		25
近代建築保存対策に関する		
研究調査協力者会議開催される		26
東京芸術大学所蔵名品展		26
我が県の文化行政		
文化的風土づくりをめざして——静岡県——		28
美術館・博物館・文化施設めぐり④		
「印象派」のブリダストン美術館		30
国立劇場ニュース		31

東南アジアとの文化交流をめぐって(一)



鈴木一郎

(国際交流基金資料部長)

熱帯と温帯の生活感情の差

バンコックでは殆ど毎日朝六時に夜が明けて夕方六時に暗くなる、夏と冬で十五分の差があるであろうか。四月、五月が特に暑いけれども、大体は一年中、殆ど同じ気候である。これが日本の場合、夏は日が長くなり、冬はもう四時頃になると暗くなる。そして春夏秋冬それぞれ季節に応じて気候が変わる。だから夏が来ると夏着を出したり、クーラーをつける。冬が来れば冬着を出してヒーターをもち出す。いわゆる四季の変化の中できりきり舞いをしているわけだ。

ところが、熱帯地方にはこうした変化がないし、暑いから、一年中裸でいてもかまわない。タイの農村に行ったら小学校の生徒が半袖のシャツにカーキの半ズボンの制服を着ていた。しかし、学校から帰ると、ぬいで裸になる。温帯の先進国に近づくために、こういう「西洋服」を着せられているわけであるが、本当は裸の方が涼しいのである。そこへ温帯人種が視察に来て、裸ではだして遊ぶ子どもをみて、

「後進国の人はかわいそうだ」という。かわいそうでも何でもない。その方が涼しいのである。「かわいそうだ」というのは雪の降る国の人間の感覚であろう。雪の中で裸でいたら「かわいそう」ところではなく、死んでしまうわけだから。

日本の一・三倍の国土は、その大部分が平野で、これをメコンとメナムの二大河がうるおしている。米はあり余っていて輸出している。しかも二毛作はやっていない。この広い土地に日本の半分以下の人口が住んでいるのである。だから土地も安いし、住宅も簡単なものでよく、降雪に耐えるような建築は要らない。だから、衣・食・住どれをとってみてもそんなに問題はない。

よく発展途上国というと、何か救済を必要とする「かわいそうな国々」と思いがちであるが、国によって差はあるが、衣・食・住に関する限り必ずしもそうではない。逆に山ばかりの小さな島国に一億一千万の人間がひしめいている日本の現実の方が、ある意味では「かわいそう」である。

一つの例を挙げてみよう。チュラロンコン大学

といえは、タイの東大であるが、そのタイ人の主任教授の月給が約五千バーツ（一バーツは十五円位だから日本円で七万五千円）である。修士号をもつ若手の講師の初任給が千八百バーツ、二万七千円である。この金額だけ見るとかわいそうだという言葉が出そうである。それにもかかわらず、これらの教師が自動車を所有し、メイドを使つて暮らしている。なぜ、それが可能なのであろうか。

まず衣食住にどの位必要かを調べてみる。インテリの場合、平均千バーツ位しか使っていない。あるいはそれ以下かも知れない。タイで最近出来た最低賃金制によると一日二十五バーツとなっているから、三十日働きつめに働いても、七百五十バーツ位にしかならない。つまり、千七百五十バーツあれば、メイドを雇って男も女も働くことが出来るし、暮しには困らない。（但しこれはインテリ層の場合である。）

だから、これ以上とっている層は、残った金で、衣食住以外の物が購入出来る。ある日本人が運転手を雇ったら、その運転手がすぐ家を作りはじめたというのでびっくりした。雇った方は日本にまだ自分の家がなかったのである。

これが熱帯地区全部そうだとはいわないが、ともかく、生活最低の線がかなり保証されていることは事実であろう。だから生活の仕方にも至極のんびりしている。タイから日本に来た学者達は一様に「何で日本人はこんなに速く歩くだらう」という。歩き方まで違っているらしい。四季の変化にともなう降雪や台風の中できりきり舞いをしている温帯人に見れば、南方人はとてものんびりしていて、怠け者に見える。別に怠けるわけではないが、慌てる必要もないのである。つまり四季の変化という「時間」

の中でかまわっている人種から見ると、この南方の「時間のない世界」は「永遠の天竺」なのである。この永遠の世界の住民の中に、時間の中できりきり舞いしている中国人(華僑)や日本人がやって来て温帯人のテンポでかまわれば、儲かるにちがいないが、相手にしてみれば、いい迷惑であろう。

もう一つ別の例を挙げよう。

プリンストン大学で国文学を教えていた玉井乾介教授は現在タイの大学で教鞭をとっておられる。米国の場合、学生の方も日本文学については翻訳などを通して、ある程度の知識があつたし、日本語の能力もタイの学生とは比較にならぬ位高かったため、やり易かったが、タイではかなりあたり前なことでも、かんでふくめる様にして教えないければならなかった。しかし一年程教鞭をとられたあとで、どうもわからずこの出来ないものにぶつかっているのである。それは季節感の相違である。学生に「日本に行ったら何が一番見たいか」ときくと「桜の花が見たい」という。行く学生は六月に着くので「桜はもう散ってしまった」というと不思議な顔をしている。よく調べてみると、学生は桜とはアゲンペリアの花の様に一年中咲いていると思っていた。そこで寒い冬のあとで、春が来て、パツと桜が咲く日本の話をして、春を待つ気持、満開の花の下で酒をくみ詩を作ること、しかも花の方は一週間位で散ってしまうこと、日本では「花のいのちは短い」という表現があつて、それと「美人薄命」をむすびつけ、「うつゆくもののおわれ」という特別な美の見方が、あることなどを説明しておられた。同じことが「中秋の名月」についてもいえる。文学では花といえ

春、月といえ秋、雪は冬といった約束がある。「源氏物語」を説明しておられる玉井先生に、タイの学生が「どうしてこんなに一頁も女の着物の柄の説明があるのか」と質問した。一年中、同じ様な夏の衣裳ですませる熱帯では、不思議に思えるもの無理はない。日本文学では、女の衣裳に花があれば春、月があれば秋といった様に、それによって季節のうつりゆく様が理解出来、それから「もののあわれ」という日本的な美的価値が生まれているのであって、この季節をはなれては俳句も文学も成立しない。玉井先生は、だから、一番先にこの違いをはつきり説明して、「あなた方にはわかりませんよ」と釘をさした上で、「想像の日本文学」をタイ人に教えることにしておられる。

しかし逆もいえる。タイの現代文学がいくつか日本語になっているが、タイを知っている日本人には面白いが、日本の一般にとっては平面的であまり受け入れられず、出版社でも「東南アジア」というとタイトルだけで売れないといつて、出版したがらない傾向がある。これはたんに東南アジアに対する不当な優越感の裏返しとして解釈されるべきではなく、四季の変化の一つも表現されない文学などというものは、温帯人にとっては耐え難い程つまらない作品としか眼に映らないからであろう。

そんな中で日本文学を教えておられる玉井先生の指摘は傾聴に値する。「もののあわれ」はプリンスの学生には理解出来た。なぜならプリンスには雪が降るからである。この点だけに限るならば、米国の学生が特にタイの学生よりすぐれているわけではなく、それぞれの学生のおかれている自然の条

件が理解を容易にしたり、困難にしたりしているのである。そしてわれわれが、東南アジアやその他南方の開発途上国とよりも、欧米先進国と精神的につながりやすい傾向をもっているのも、欧米が文化的にすすんでいるからという理由だけではなく、同じく四季の変化のある温帯人種として、物の見方に共通なものがあるからかも知れない。

東大の松井透氏が「人間はすべて同じだ、という前提は、文化交流にとっては一種の危険思想だ」といつておられる。それぞれの国には異なった歴史や文化があり、異質の自然条件がある。それを無視して、ニューヨーク的発想、ジュネーヴの公式、東京の論理をそのままの形でもちこんで「援助」だと思つてみると、まるで食いちがった結果になる。カルチュラルインペリアルイズムなどという援助する側には想像もつかない反撃が来る。玉井先生のやつておられるような「あなた方には恐らくわからないでしょう」という前提は、実に意味深い。それはひっくり返してみると「われわれにも東南アジアの人々の本當の苦しみや痛みはわからない」ということになる。一番必要なのは、受難勉強的なやり方での東南アジアの知識の収集ではなくして、こうした差異の存在の理解であり、なぜそういう差があるのかという問題提起であり、そうした問題を中心としての調査、研究であろう。

バンコックに在る間に多くの学者や専門家がそれぞれの立場から「調査」に來られた。その中に「東南アジア人の対日意識調査」というのがあつた。「日本にとって」これは重要なかも知れないが、ある意味ではナルシズム調査である。他国民が日本をどう見るかということとはたしかに「日本人」にとつて

て異なっている。

フィリピンでもタガログ語は一応公用語となつてはいるものの、タガログ語人口は、全人口の四五パーセントしかなく、タガログ語の教科書をミンダナオに強制すれば、かなりの抵抗が見られるであろう。インドネシアは一九三三年オランダが作った人工のインドネシア語が国語となつていたので、二応教科書作りには問題ないが、ジャヴァ語、バリ語の他にボルネオ、スマトラでは、また、それぞれの言葉があるから、国語はそれ自体どの土地にも属さぬ不安定性をもっている。

ひるがえって日本の場合、明治の教育令により、新しい義務教育制が施されたが、その時に、教科書を何語にするかという問題は全くなかった。徳川時代の三勤交替や領地替えなどの強制によって、地方の方言はあるが、地方でも公用語は江戸の言葉、ないし將軍家の言葉となつてしまつていたからであらう。しかしこの東京弁の国語化は、東京中心の文化政策となり、為政者には好都合であつたが、現在でも地方から東京の学校に転校してくる学生には、かなりの重荷になつてゐる場合があり、これ程、人種などからんだ国語問題の少ない日本にも、表面に出ないが心理的な困難を形造っているのであるから、東南アジアの国々の文部省が抱えている言語問題が如何に深刻であるかは論をまたない。よく日本にはNational Identityがあるといわれるが、こちら側はそう思つていなくとも、東南アジアの国々から来た人々には、このように人種、言語があまり大きな社会問題となつておらず、宗教についても、かなり寛大な日本の姿は、羨ましく思われるのではあるまいか。

言葉と文化

は重要であらう。

しかし、最近の調査は少し変わつてきている。「日本をどう見るか」よりも、「一体日本はこれらの国々に對してどういうコントリビューションをなすことが出来るか」という調査に移つて來ている。それは「ニード調査」ともいわれている。しかしそういうわれれば、援助を受ける側は色々注文を出すであらう。

今後の問題としては、さらに一步を進めて、「どうして理解出来ないのであらうか」というもつと根本的な点を色々角度から検討すべきであらう。その一つが「氣候」である。

一九七一年秋、二か月にわたつて東南アジア文部大臣機構(SEAMEO)の招きで、東南アジア八か國を訪れ、各文部大臣、担当官、大学学長、美術館長、博物館長、図書館長、公文書館長、研究所長などと会談を行い、それぞれの機関、研究所を見学させて貰つた。その際かなり深刻な問題として気づいたことの一つは教科書作成に伴う用語の選択であつた。

東南アジアと一概にいけれども、各國とも色々な人種、宗教、言語をもつていて、一般に dualistic society と呼ばれている。これは米國にもいえることであつて、米國の「ドル貨幣には多様の統一」UNIM EX PLURIBUS と書いてある。この様に多様な民族、宗教、文化をもつ國々が、新しく独立國となつたわけであるから、各文部省としては、「全國に統一的使用される言語による教科書の作成」を考へるのは

当然であらう。

よく東南アジアは陸と海の二つの東南アジアに分けられるが、まず陸の東南アジアを見ると、旧仏印三國とタイ、マレーシア、ビルマなどは、古代から互いに土地を奪取し合い、モン族などの現住民は常に新しい支配者にとつてかわられてゐる。そこへ歐洲からの植民地化が行われ、タイを境として仏印三國はフランスの、ビルマ、マレーシアは英國の勢力圏におかれていた。したがつてその國境線も、必ずしも人種、言語、宗教などによるわけ方でない。それが現在でもタイとラオス、カンボジア、國境問題、あるいは南タイとマレーシアの問題となつて後をひいてゐる。

一方、海の東南アジアも、それぞれの島がそれぞれの言葉をもつていて、そこに印度教、アラビアの回教文化が入り、さらにポルトガル、オランダ、スペイン、米國などの文化が混入して、複雑な様相を呈している。

さて、國語問題に戻ると、タイの場合は、獨立國であつたためタイ語で教科書が作られてゐるが、ソクラから南の回教國ではマラヤ語が使われていて、このタイ語による教育はかなりの重荷になつてゐる。マレーシアは、元來マラヤ語、中國語、タミール語等各種の言葉が使われてゐたが、それに英語教育が加わり、マラヤ語國語化運動(バハサ・マラヤ)は政府の肝入りでかなり進捗してゐるものの、學術用語などをマラヤ語化する問題は深刻である。シンガポールの場合、國際都市として英語を使う場合が殆どであるため、教科書問題はそれ程大きくないけれども、家庭の言葉はマラヤと同様、人種によつ

国語の問題はさておき、独立後の文教政策の中でもさらに困難な問題は、歴史の教科書の作成である。独立後、自国の歴史を教えるようとしてみても、それらはすべて旧宗主国の外国人が外国語で作成したもののばかりであった。やっと最近になって、かなりのものがそれぞれの国の学者によって書かれるようになったが、それでも註をみると、古代史の研究などは相当の部分これまでの外国の学者の研究にたよっていることがわかる。旧統治者の書いた東南アジア史は、主として西洋人が「発見した」時点からの歴史であって、そこでは独立運動の志士で投獄された人物はレベルと誌されている。独立後はこれらのレベルは「英雄」に書き改められるはずであろう。

旧宗主国というと、すべて植民地主義者として片づけられがちであるが、ごく僅かではあるが、植民地化以前の東南アジア史や考古学に取組んでいる学者もみうけられる。中でも西暦一世紀から十五世紀までのインド化されたインドシナおよびインドネシア「Les états hindouises d'Indochine et d'Indonesie」を書いたセデス George Cedes の業績は、まさに学問のオーケストレーションともいうべきもので、現代東南アジア語のみならず、モーン、クメール、バリ、サンスクリット等の古代語を解読したり、中国の古文獻まで引用してこの地区の古代史をまとめあげている。古代の謎の大国スリヴィジャヤア国やダワラヴァティ国の存在を立証したのもセデスである。これはその後の東南アジア研究に大きな刺激を与えている。ホウエットレーの「黄金のケルソニーズ」はマラヤ半島の古代史であるが、中国、ギリシャ、ラテン、アラブ、インドの言葉による資料を総合的に扱っている点、セデスの業績に比

肩すべきものであろう。フランス人グロリエ、デュボン、アルシャンボーなどは、考古学の知識を駆使して、数多くの政治的制約の中で、相変らず古代東南アジア史の研究を行っているようである。インドネシアでも、オランダの学者が戦前からの仕事をいまだに続けている。

この様な例は枚挙にいとまがない。二十世紀の政治事情がどの様に変っても、やるべき事（やりたい事）はやる——といった西欧の学者の意気と、それを支えている政府の文化政策には頭さがるものがある。そして、そうした研究や発掘などを現地の若い学者たちと一緒にやっている。それらの人物のまわりには、旧宗主国の植民地主義などの汚名をぬぐい去る様な新鮮なふんい気を作り出しているし、また、そうした業績も東南アジア人自身がこれから書く自国の歴史作成の上で、重要な意味合いをもっていることも事実である。何回、タイ人の歴史学者や考古学者から、それら欧米人の権威の名前を尊敬の念をこめてきかされたことか。そしてそれらの業績を無視しては自国の歴史が書けない現実の中に、東南アジアの痛みがあるように思う。

問題はそればかりでない。自国語（それもまだしつかりしていないが）で学問をやろうという場合に學術用語がまだ完訳が出来ていない例が多い。マレーシア大学学長のアズイズ氏は、十年前、同大ではじめて「マラヤ人」の経済学部長となった。それまでは学部長は全部英国人であり、英語で教育が行われていたという。同氏が経済学部長になってはじめてやったことは、マラヤ語の「カー」には Price と cost の両義がある。ところが経済学では「価格」と

「コースト」の二概念が区別されていなくては講義が出来ない。同氏は在来の「カー」を「価格」の意味だけに使うこととし、「コースト」は「コース」という別の言葉を作ったといっておられた。マラヤではこの数年来国語化運動がさかんである。バハサ・マラヤ運動といわれている。ちょうど、明治の頃フィロソフィーを理学、知学などと訳し、最終的に哲学が定着した様な例が日本にもある。しかしその場合でも、長い間、漢文で学問をやってきた日本には、学校や研究機関めいたものがかんり存在していて、またたく間に外国の學術用語は日本語となったのであるが、自国語、すなわち国語ですらまだ確立出来ていない国の場合、明治の日本の例とは比較にならない程の問題を含んでいる。フィリピンで文部省でも英・タガログ語學術用語辞典が出来ていて、担当官が誇らしげに一部くれたが、その人も This is Greek to me. といって笑っていた。コンピュータなどという用語は日本ではもうそのまま日本語として使っているのに、これを全く新しいタガログ語の造語にして、これを暗記しないと、学問ができないうようにすることは、アナクロニズムの様なにも思われ、大変なむだな労力を払っている様にも思われるが、自国語で学問をするということが、それ程必要なのであろう。しかも、さきにのべた通りタガログ語人口は全フィリピンで四五パーセントしかないのである。

この様な問題はあまり新聞の記事にはならない。しかし、そういうところにこそ、東南アジアの真のなやみや痛みがあるのではなからうか。

編集後記

○今春第三十三回日本芸術院賞を授賞された戸板康二氏の「歌舞伎——別の視角——」は、長年歌舞伎評論をされてきた氏にしても、新鮮な観客の眼に驚かされること。他の分野でも同じことが言えるのではなからうかと思われる。

○藤田由之氏のヨーロッパとアメリカのオーケストラの比較論。我が国の西洋音楽導入の歴史と結びつけられていて興味深い。

○アキコ・カンダさんは、一つの踊りに半年から一年も稽古にかけられるという芸術の道の厳しさとその中から昇華されたものが芸の美しさとなり人々の感動を呼ぶのであろう。

○鈴木一郎氏は国際交流基金のタイ国駐在員として二年ほどバンコックに在動された。その経験に基づく東南アジア諸国との文化交流のあり方の提言は貴重である。来月も御執筆をお願いしている。

(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社きょうせい 営業課

TEL(03)三六八二二四一(代表)

「文化庁月報」九月号

(通巻第一〇八号)

昭和52年9月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社きょうせい

本社 千代田区東部中央区銀座7丁目4番12号

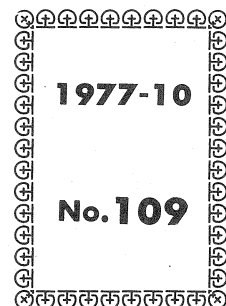
営業所 千代田区新富区西五軒町52番地

電話(03)三六八二二四一(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円



表紙 舞妓 黒田清輝筆

解説は26ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

もくじ

自由の足跡……………	安嶋 彌…………4
国立国際美術館の開館……………	村田慶之輔…………6
第一回全国高等学校総合文化祭を終わって……………	千葉県教育庁文化課…………8
東南アジアとの文化交流をめぐって(二) ——チェンマイで行った二つの話——	鈴木 一郎…………12
美術品交流のあり方を探る ——日米文化教育協力合同委員会に出席して——……………	伊藤 延男…………16
〔解説資料〕 「津市地鎮祭」の最高裁判所の判決について……………	文化庁文化部宗務課…………17
文化庁ニュース	
第4期著作権審議会発足 ——会長に稲田清助氏を再選——……………	21
文化庁長官に犬丸直氏就任……………	21
指定文化財展示取扱講習会の開催……………	21
第22回文化財修理技術者講習会……………	22
京都国立博物館秋季特別展『日本の黎明』 ——文化にみる日本の東と西によせて——……………	23
我が県の文化行政	
奈良県の文化財行政……………	杉田 善胤…………24
文化財目録を刊行して……………	山口正次郎…………27
〔紹介〕	
ギリシャの文化財保護法……………	児玉 嘉之…………28
文化庁への便り……………	29
美術館・博物館・文化施設めぐり⑤	
古美術品の根津美術館……………	30
国立劇場ニュース……………	31

東南アジアとの文化交流をめぐって (二)

— チェンマイで行った二つの話 —



鈴木 一郎

(国際交流基金資料部)

チェンマイといえば、観光地として知られているが、この地に数名の日本人が日本語の教師として、あるいは農業開発のコンサルタント、癲病院の患者のリハビリテーション、体育の指導、生花の先生として活躍していて、チェンマイの市民から好意と信頼をうけていることは、あまり報道されていない。

この小さな日本人のコミュニティーの中心となつて働いているのは、望月賢一郎というパイアツプ・カレッジ(タイの数少ない私立大学の一つ)の宗教及び哲学の教授である。同氏はすでに八、九年チェンマイに滞在していて、タイ

語はおろかチェンマイの方言まで話し、時々山嶽民族の村落に出かけておられる。ある日、チェンマイの大きな病院の院長のお宅で昼食に招かれた。敬虔なクリスチャンである院長夫妻は、食事の前に感謝の祈りを望月氏に依頼したのである。驚いたことに、望月氏(牧師でもある)は「はい」といったかと思うと、タイ語で祈禱をやってしまった。

この望月氏を中心となつてチェンマイのYMCAで日本語と生花の教室を開いたところ、大変な人気で、とうとうYMCAは大きなビルをたてて、沢山教室を作り、日本関係図書室まで設けることとなつたのである。

ジョンではないか。」といった。

終戦後しばらくたつて、私は米国のボストンに留学したが、ある日、奨学金を節約する目的で、同じく日本から来た友人と一緒にアパートを借りることになった。その際、私は二つの条件を出した。第一は、友人が料理をし、私が皿を洗う事、——これはうまくいった。第二は、米国にいる以上、日本語は絶対にしゃべらないこと。英語だけでやろう——これも友人は賛成してくれた。そこで共同生活をはじめた所が、かなり長期間にわたって二人でうまく生活することができた。

ところが我々と同様に、共同生活をやつた他の日本人学生は、二、三カ月で又別れるケースが多かつた。どうしてかと思つてしらべてみたら、互いに日本語ばかりで話をしてた。だから一寸不愉快な事があると、すぐ日本語でいさかいがはじまるのである。互いに同じ日本人じやないか、わかつて貰える筈だという甘えが、そういう結果をもたらしたらしい。

ところが私共の場合、英語しかしゃべらないことにしてあつた。随分勉強した筈ではあるが、英語で喧嘩をすることだけは、やったことがない。怒つても、どう英語で怒鳴つていいかわからない。だから腹が立つと二人とも、二、三日口をきかない。その内に忘れてしまうのである。

三年前、この日本語学校の卒業式があるので、来てくれといわれた。当時バンコックの国際交流基金事務所長をしていた私は、喜んでお引き受けて出かけてみると、卒業証書を渡すばかりでなく、祝辞をのべる役までおせつかった。場所はリンカム・ホテルという一流のホテルの講堂で、行つてみると生花が沢山飾つてあつて(学生達の作品)、着飾つた男女約五十人は卒業生であるが、他に、前チェンマイ大学医学部長で市長をやつたというおじいさんやら、学生の父兄が沢山来ていた。

催段の正面に坐らせられると、しばらくして証書を渡す式がはじまる。呼ばれると学生が一人ひとり厳肅な面持で出て来て、まず両手をあわせて私に敬礼をする。男は手をあわすだけであるが、女子は手をあわせると同時になまめかしく腰を左右に振る。大変にエレガントな感じである。証書を渡すと、左手を右手のひじにあてて、右手だけで受け取り、又、両手をあわせて、私をおがむ。これを五十人位やっているうちに、こちらもなんだか仏様になつた様な気分になる。

ついで私が何かいわされることになった。着任三カ月位で、まだタイ語は初級を半分位しかやっていないから、タイ語ではやれない。来賓には日本語はわからないから、一応英語でやる

つまり、我々二人がうまくいったのは、英語を知つていたからではなく、人を罵る英語を知らなかったからなのである。

今、皆さんも日本語を勉強されたわけだが、どうか、その日本語の知識をタイの人々の暖いメッセージを日本の国民に伝えるために使つていただきたい。」

式がすむと、チェンマイの前市長がつかつかとやつて来て、「この頃は不景気な話ばかりきかされていたが、今日、あなたの話をきいて、胸がすつとした。有難う。」と手を握つてくれた。ジョン・ホプキンスで医学博士号をとつてきたという老人であつた。

二

又、一年たつてチェンマイで国際親善の集いをするから来てくれという連絡が望月氏から寄せられたので、伎楽面、舞楽面、能面などの写真を五十枚程もつて出かけた。チェンマイ大学医学部の体育館に展示場が作つてあり、各国の旗が飾つてあつた。それぞれの展示をみるとみんな観光用のポスターや民芸品などが少しばかりならんでいる。その中に、日本の所だけは、五十枚、妙なマスクが一ぱいにならんでいて、観客を睨みつけている。だから押すな押すなの

ことにする。まず、習いたてのタイ語で「私はタイ語は少ししかできない」とやつた。「スコシ」だけは日本語である。学生がどつと笑う。「日本語の方は大変上手です。」とやると又、笑う。「ただ私が日本語でやると、ここにいる方の半分位しかわからないでしょう。しかしもしタイ語でやつたら、だれにもわからないだろう。」という、全員ころがって笑つて、中には「わかる、わかる」と叫ぶのがある。「だから、仕方がないので、英語でやります」という切り出しで、次の様な話をした。

「数年前に米国の前大統領のニクソン氏が中国を訪問した直後、日本ではコミュニケーショングヤツプということが、さかんにいわれ、コミュニケーションに関する研究やセミナーが開催された。ある日、私もシンポジウムに呼ばれ、パネルディスカッションに参加することとなった。沢山、その道の専門家、学者、翻訳家などの意見が出たあとで、私の番になった。少し皮肉な気持になつた私は、「一体、コミュニケーションというのは手段であつて、目的ではない。どういふメッセージを伝えるかが重要なのだ。宣戦布告だつて一種のコミュニケー

盛況であった。ある米国人が、「これが有名なカブキの面か」というので、「そんな新しいものではない。伎楽は七世紀、舞楽は八世紀、能は十四、五世紀のものだ。カブキは十七世紀以後のもので、マスクは使わないのだ」というと、感心している。よく考えたら、歌舞伎のはじまったのは、米国の独立以前であるから、よくもこんなに古いものが残っていると思つたらしい。そこで、伎楽面にはペルシヤ人の様な西域の人間の顔があること、それが、舞楽を経て能面になるにしたがつて次第に日本人の顔になっていくことなどを、五十枚の写真で説明してやる。結果として、単に写真だけではあつたが、あるテーマにしばって、考えて出品したという印象が出ていた。観光用ポスターからは、この迫力が出て来ないのである。場所は東南アジアではあるが、本格的な美術品は、たとえ写真であっても、これ程の強力な刺激をタイ人ばかりでなく、すべての訪問者に与えたようである。

師範学校の校長だというタイ人の老婦人が、「もう二三日展示しておいてほしい。学生をつれて見にくるから」といったが、企画は一日だけだったので、はずしてバンコックにもつて帰ってしまったら、翌日、本当にバス二台で学生たちをつれてチェンマイまで見に来たそうである。とりはらつてあつたので、がっかりして帰

つていったと、主催者側から報告があつた。

よく海外への文化紹介という、とてつもなく金のかかる企画ばかり考えがちであるが、この様なテーマのはっきりした写真展などは、手軽にできる上に、かなり啓蒙的な役割を演ずることを知った。

翌日は同じ体育館にバンドの席を設けて、三千人位の人を集めて、国際親善の集いが開かれたので、和服にはかまをつけて出かけた。バンドが音楽をやると、各国の人々がダンスをはじめた。一曲すむと、その間に各国が出し物を出すことになっていた。ABC順に、アメリカ、ビルマ、カナダとやつて来て、Jの所まで来る。望月さんたちが、「鈴木さん、何かやってくれ」という。突然のこと、どうしていいかわからないし、見ていると、歌つても、踊つても、何しろ三千人もいるのがやがやして、ちつともしまらない。そこで一計を案じて、日本の夫人たちから、扇子を二本借りて、ホールの真中に出ていった。スポットライトがあたる。急にシーンとした。何しろタイのテレビではよく日本映画をやつていて、チャンバラの場面などは見ているが、ここに本物の日本人の男が、羽織、はかまで扇子をもって現れたのである。

開口一番、「これから日本の学生の応援団をや

るから全員協力してくれ。私が扇子を一つ振つたら、一つ手を叩け、扇子を振りつづけたら、手を叩きつづけてくれ」といって、まず練習をする。扇子をパツと振ると三千人が、一つ手を叩く。パラパラやると、拍手の渦巻きが起る。そこで、例のチャッ、チャッ、チャッというリズムをはじめて、速くしたり遅くしたりすると、三千人がこれに和してついて来た。

大きな拍手をあとにして、又、テーブルに戻つてくると望月氏が「しまった」という。「どうしたんです」ときくと、「あんまり興奮したんで、あなたの写真をとるのを忘れちゃった」。

Jの次はNで、ニュージーランドの白人が三人飛出して来た。殆ど裸体で、腰に木の葉をいっぱいつけて、大声で叫びながら、とんだりはねたり、大さわぎである。私の和服姿の次だったので、これもパンチがきいていた。この野蛮人たちは、実は世界銀行のコンサルタント達であつた。それから後は、出し物に対する観客の態度が一変して、親善の集りらしいよりも上りをみせた。(ただし、当方は生れてこの方、応援団のリーダーなどやったことがなかったのである。)出演料は零であつたが、結構、国際親善の効果もあげたように思う。

そのあとで、望月氏が、「明日、パイアアップ・カレッジで、私の今学期第二回目の哲学の講義があるんだが、四十五分でもいいから、学生に話をしてくれないか」といわれた。つい引き受けてしまったが、これは応援団みたいにはいかない。望月氏は、私がかつて英文に翻訳した波多野精一先生の「時と永遠」(ユネスコ国工委員会出版)の訳文を読んでおられたのである。一晚ホテルで考えたすえ「認識論」を四十五分で行うことにした。

その時間になって大学に行つて見ると、学生が一人もいない。どうしたのかと思つて望月氏に訊ねると、「この間、上級生が、新入生をシゴいた時、そのシゴキ方が少し行きすぎであつたために、新入生が怒つて、今、大学側と団交をやっている」という。それではもう来ないのかと思つて二十分位待っていると、急にバラバラかけ出して学生達がやつて来て、たちまち教室が一杯になった。そこでできるだけやさしい英語ではじめた。

まず黒板に「TO KNOW」とかいて、「知る」とはどういうことかと学生にきいてみる。勿論、答えようがないので、学生は黙っている。そこで、「諸君は、望月先生を知っているか」ときく

と、一同「イエス」。「そんなら望月先生について何を知っているか、知っていることをいって見なさい」というと、一人が「HE IS FAT」という。黒板に「FAT」と書く。望月先生はにやにやして見ておられる。「その他に?」ときくと「HE IS BALD」という。先生の頭はうすいが、はげてはいない。しかし、又、黒板に「BALD」と書く。タイの学生はなかなかひょうきんである。みんなケラケラ笑っている。更に「先生には子供が何人いるか」とか「奥さんは何人か」とか次々きくと何とか答えているが、次第にわからなくなつてくる。「心臓はどっち側についているか」というと左だと答える。だって何千人に一人位右にある者もいるが、どうして左だとわかるかというと、答えない。又、望月先生自身でもからだのどこかに大変な病氣をもつておられるかも知れないのに、御本人すら知らないでいることだつてあるじゃないか。そこで君達が「知っている」という望月先生は、目や耳でみたりきいたりした限りにおいて知っているにすぎないのだ、といって黒板に「経験した限りにおいて」と書く。

そして、この「知るということは何か」という問をなげかけたのは、プラトンであり、知識の限界を知り、「物それ自体は不可知だ」といったのが、カントだといったことを一寸のべてお

いて、「私自身も、新聞や本で、タイの事はかなり詳しくよみ、タイを知っているつもりでやつて来たのだが、こうしてチェンマイに来て見ると、君達の様な陽気な学生がいり、タイの人間が冗談が好きで人種だなどということは、ちつとも知らなかった。同じように、君達も新聞や本やテレビで、日本を知っているつもりでいるかも知れないが、日本とはどういう国かといわれると、私自身にもよくわからないのだ。哲学という学問は、他の学問とちがつて、知識の限界というものを教える学問なのだ」といって話をすませ、時間が遅れてしまったために、望月先生の車にとびのり、飛行場にかけて、やつと出発時間に間に合い、バンコックに帰つて来た。

帰国してすでに一年以上たつけれども、あのチェンマイの学生たちのすき透る様なまなざしと、笑いこける姿は、いまだに忘れることができない。

(すずき・いちろう)

* * *

編集後記

○芸術文化の秋にふさわしく、十月中旬に四つめの国立美術館として国立国際美術館が大阪の万国博覧会跡地に開館する。日本の美術と世界の美術の相互交流の歴史と現状を教育的に理解させることを主たる目的としている。同館の村田学芸課長に詳しく、美術館の目的や性格を書いて頂いたが、児童生徒の団体鑑賞等が期待される。

○初の高校文化祭が千葉県で開かれ、県教育委員会を始め、出演の高校などの協力により大成功を取めた。この経験が生かされ来年以降増々発展し、さらには将来、国民的な行事へ成長することが期待される。

(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ゑようせい 営業課

TEL(03)3368-1141(代表)

「文化庁月報」 十月号

(通巻第一〇九号)

昭和52年10月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区麹町3丁目2番2号

発行所 株式会社 ゑようせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千代田区新富町52番地

電話(03)2681-2141(代表)

振替口座 東京 91-61番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円